

水辺の情報は、こちらからどうぞ！



realpublicestate
公共 R 不動産

公共空間の物件情報 「公共 R 不動産」

「公共 R 不動産」とは、使われなくなった、もしくは今後使われなくなる（使用停止）公共空間の情報を全国から集め、それを買いたい、借りたい、使いたい市民や企業とマッチングするためのウェブサイトです。

また、その再活用のアイデアや事業主体を募るシステムを持っていますのが大きな特徴。行政の枠組みのみなかだけでは生まれにくい発想や使い手を、市民や企業から引き出し、マッチングします。さらに、全国の魅力的でユニークな、公共空間再生の事例を紹介する役割も担います。

そこにはさまざまなノウハウや手法が存在し、それを全国で共有したいと考えています。そういう意味で公共 R 不動産は、公共空間再活用の総合的なアーカイブでもあります。

<http://www.realpublicestate.jp/>

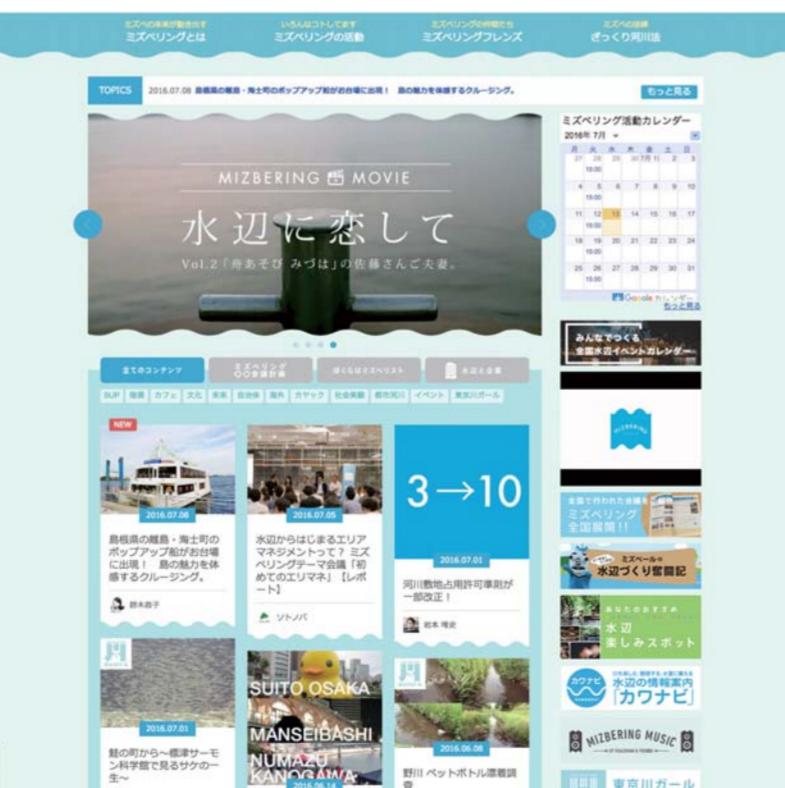
みんなの経済新聞から
「みんなの水辺新聞」が登場！

<http://mizbenews.jp/>



公式サイトでは全国の水辺
情報や事例を紹介しています。

<http://mizbering.jp>



2014年春にスタートしたミズベリング・プロジェクト。公共空間の1つでもある水辺が、手を挙げたイノベーターたちによって、いま変わりつつある。行政マンから企業マン、音楽プロデューサーまで、その活動の最前線がここにある。あなたの水辺創造の、導火線になれば、と思う。



ところで 公共空間は、 誰のモノだ？



今まで公共空間の在り方について、市民も行政も一緒になって論議がなされてきました。そんなことを感じたミズベリング・プロジェクトは、全国各地で数多くの会議をしてきました。

アイデアを出しあったり、利活用の方法を模索したり、新しい活動を讃えたり。

すでに社会実験が動き出したところもあります。無意識だったインフラに、新しい発想で光を当てるだけで、そこに人が集まり、ビジネスが生まれ、笑顔があつまる。無名な場所が、賑わう場所になる。

そんな公共空間の大きな可能性を、公共空間と利用者を結ぶマッチングサイト「公共R不動産」を運営されている馬場さんに、公共空間、そして水辺の未来創造について聞いてみました。

馬場正尊 (ばば まさたか)

建築家・公共R不動産ディレクター・東北芸術工科大学准教授・Open A代表。
数多くの建築・設計の見地から、世の中の公共空間の在り方に疑問と可能性を問う。
近著「PUBLIC DESIGN~新しい公共空間のつくりかた (学芸出版社)」。2014年、
ミズベリング東京会議のワークショップでファシリテーターもやっていた。

「公共空間」は、いつしか「行政空間」になっていた。

最近驚いたのは、児童公園にいたら、使っちゃダメ！の連呼なんですね。「ベットが糞をするから砂場に入るな」、「芝生は養生中だから入るな」、「ボール遊びは近隣に迷惑だからするな」。公園で映画上映会をやろうと思ったら、その使用許可のために「まずは組合つくってください」と言われる…。

本来、市民に開かれているはずの公共空間を使うだけでも、ものすごく不自由になっている。これじゃパブリックスペースが、もはや「公共空間」ではなく、行政が管理するための「行政空間」になってしまったと感じました。

住民と行政の間にも溝がある。

同時に「団地の再生」をしていて、団地の住人の一人が、パブリックエリアの木を指して、「毛虫がいるから桜の木を切って！」「落ち葉が堆積して歩きづらいから、木を切ってくれ！」とクレームをつける。で、管理者が木を切ると、ほかの住民から「なぜ、切ったんだ、なんでだ？」と怒鳴られる。全くコミュニティの合意がとれていない。本来は自分たちの空間でもあるのだから、自分たちでなんとかする発想を持たないといけないはずなのに。行政も一部の声だけを聞いて、サイレントマジョリティの声を無視し

ている。それは市民側にも行政側にも問題がある。関係づくりができていない。合意形成がホントにできていないことを知りましたね。

行政から民間に委ねる勇気と英断が欲しい。

財政状況も見ても、福祉にかかるお金は増加する一方で、人口は減り、税収も減っていくが、サービスの質は落とせないも事実。だとすると、行政が重たく抱えていた「公共空間」を民間に委ねて荷を軽くしないといけないのは自明なんですね。

そこでそんな場所をマネジメントする空間の

在り方や、デザイン手法、所有の方法を変えていかないといけない。そんなことを拡散しようと思って、2013年「RePUBLIC 公共空間のリノベーション※1」という本を書きました。



※1 「RePUBLIC 公共空間のリノベーション」

(学芸出版社)

※2 「PUBLIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた」

(学芸出版社)

※3 公共R不動産

www.realpublicestate.jp

※4 BID

BID(Business Improvement District = ビジネス活性化地区)とは、民間が行うエリアマネジメント活動の資金を自治体が再配分し、公共空間の管理も一体的に任せて街づくりを推進する制度。



馬場さんと話した、公共空間開発の大切な

7つの習慣

- ①「公共空間」をルールでしばる「行政空間」にしてはならない。
- ②行政と民間がいつでも話せる間柄でいて欲しい。
- ③行政が「公共空間」を民間に委ねる勇気と英断が欲しい。
- ④あたらためて「パブリックスペース」は誰のモノか？を掘り下げて欲しい。
- ⑤新しい資本主義のカタチになるよう、利用価値が収益を生む仕組みを作って欲しい。
- ⑥点から面開発で資産価値の高いエリアづくりをして欲しい。
- ⑦「俺が変えてやる！」という熱血プレイヤーを信じて、共に歩みたい！

この本の反響はどうでしたか？

お陰様でたくさんの声を頂戴しました。行政さんの方が多かったですかね。同時に、異口同音、「じゃ、どうしたらいいの？」と。問題意識は全く同じ。では、「どのような方法でパブリックスペースを民間に委ねたらいいのか？」、「どうしたら、こんなイメージを実現できるのか？」、「手続きがよくわかりません！」、「どうしましょう？」という逆質問の嵐。さらに、民間も「こういうことをしたかった！」、「どう行政にアプローチしたらいいんでしょうか？」と。お互い、やりたいのは山々だけど、マッチングのシステムと運営の手法がほとんど存在していないということが明白になったのです。

いま一度「パブリック」の概念をみんなで掘り下げたい。

本を書いたことで、公共空間についてあらためて考えるきっかけになりました。「パブリック」という概念、「パブリックスペース」とは、いったいなんだ？ということです。彼らが考える次の時代のパブリックスペースは、「どんなカタチが理想なんだ？」、「どう運営＆マネジメントしなきゃいけないんだ？」ということを考える必要がありますが、民間でも民間もあると思うのです。

取材していると、その答えは、今までの行政が考えてきたフロアやシステムの方法論の外にあると思えてきました。で、そこをまとめたい、調べてみたい、追求したい、と思って、統編として今回「新しい公共空間のつくりかた※2」を書いたんですね。

2冊目の特徴は？

1冊目の方は公共空間はこう使えるという企画書であり、今の方は、それを実行するための方法論を探す旅にでた。そんなイメージでした。方法論を展示して、共有して、勉強プロセスをそのまま本にしました。2冊目で挙げた人々は、既存の方法論とは違う方法でパブリックスペースのような空間をつくると運営している人。で、どうやってつくれたの、なんでつくったの？どう運営してるの？という具体的な話を聞きました。

公共空間は、新しいアプローチができる場所ですか？

この6人は、資本主義という社会システムの枠組みを否定もしていない、逆に利用しながらも、なにかを共有しながら、プロジェクトや空間、ものすごくハイレベルな空間をつくるようされています。誰もが自由に楽しく利用できる「素直な幸せ」づくり。そこに高度に所有を主張しない新しい資本主義のカタチがあるように思いました。

僕たちは、公共空間こそ、もっと新しい資本主義の実験ができる格好のステージだと思うんです。パブリックセクターが持っている土地の上で、民間や企業がパブリックマインドを持って維持・運営していくことを運命づけられた空間。いまの資本主義を新しく上書きしていくムーブメントが生まれはじめている予感がします。

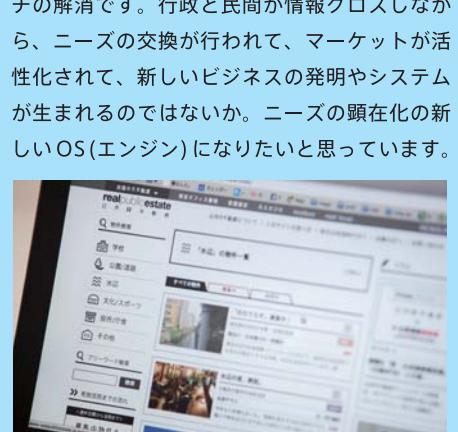
「公共R不動産」はどういう経緯で？

同時に「公共R不動産※3」というサイトをつくりました。

行政は山ほど、なんとかしたい物件をもっている。かたや民間の人も公共空間を使って新しいことをしたいと思っている。お互いのニーズはあるけど、マッチングするシステムがない。

たとえば、北海道の公共空間情報は、その役場のウェブサイトの奥深いところに載っていて、見つかりにくい。そんな物件を欲している東京の企業はいるのに、その情報は届かない、わからない。

「公共R不動産」はお互いのニーズのミスマッチの解消です。行政と民間が情報クロスしながら、ニーズの交換が行われて、マーケットが活性化されて、新しいビジネスの発明やシステムが生まれるのではないか。ニーズの顕在化の新しいOS(エンジン)になりたいと思っています。



ミズベリング。

水辺はどうですか？

水辺は巨大なパブリックスペースですし、水があるということで最も面白い可能性がある反

面、法規制で最も難しいとも思っていました。港湾に沿う河川にしきるルールも違うし、治水や防災があるのでバラメーターが多いですよね。権利者も複雑で。でも、よくよく勉強すると、意外に新しいこと(社会実験)ができることもあります。わかつてきて、これからすごく魅力的で楽しめる公共空間じゃないでしょうか。いまオリンピックで舟運という交通インフラも船ははじめました。シカゴのような水辺のツアーとかを、やってほしいですね。「はとバス」の水上版。あれぐらいいになるといいでですね。

これからの公共空間は、点開発から面開発でエリアリノベーションの時代へ。

20世紀型マスター・プラン型の計画ではなく、省益を外して小さな点の開発をたくさんリンクしていくネットワーク型の開発案をつくるべきだと思います。そして、そのエリアでBID※4のようにマネジメントして資産価値の高いエリアをつくりていく。そんな行動が必要だと思います。

どんな人材が必要ですか？

「公共R不動産」に問い合わせをくださる自治体の方は、企業経験者が多いですね。「俺が変えてやるぞ」的な熱血マインドがある人。自治体の問題に問題意識がある人。未来の絵が描ける人。行政の言葉を民間の言葉に置き換える力のある行政マンが嬉しいですね。実際、そういう熱血行政マンが、そのまちの変革者になると思いますね。



田中謙次

リバービジネス創出家

「おしゃれなり・BAR」開催の着想と、 日野川流域についてお聞かせください。

かなり長い前置きがありますがいいですか？（笑）。まず背景として、私は20年以上（株）田中地質コンサルタントという地質調査の会社で働いています。橋や道路、田んぼ、土砂災害などの地質を調査する仕事です。その仕事を通じてあるとき、日野川流域に110年前の石積みの砂防堰堤（さぼうえんてい）が草木に埋もれていることがわかつたんですね。埋もれているけれど、きちんと機能もしている。

砂防堰堤というのは、豪雨時に土砂が一気に流れ出ないようにくいとめ、災害や洪水氾濫から下流側の家々を守るためのものです。今の砂防堰堤というのは大体がコンクリート。こんなに立派な石積みの砂防堰堤というのは土木資産だと思うんです。さらに、女衆や子どもは歌に合わせて土を踏み固める「千本突き」をし、男衆が石を積み重ねるその作り方は、流域に継承されてきた文化だったんですね。

文字通り埋もれていたこの資産を未来に継承していくことで元気になしようと、私の父が声をあげました。その頃設立したのが、環境文化研究所です。そうして地元の人と協力して復活させた「アカタン砂防堰堤群」は、2004年7月に国の登録有形文化財となり、今でもその機能を発揮しながら福井の観光名所にもなっています。こうして親子二代に渡り、日野川流域の環境と文化の継承活動に深く入り込んで行くわけです。

月に国の登録有形文化財となり、今でもその機能を発揮しながら福井の観光名所にもなっています。こうして親子二代に渡り、日野川流域の環境と文化の継承活動に深く入り込んで行くわけです。

日野川流域にとって、ミズベは生活と密接につながった文化なんですね。

流域文化はどうしたら継承していくのか？ホワイトカラーの大人たちを集めで話をするのも大事だけど、この地域を担っていく子どもたちにきちんと伝えることは、もっと大事。じゃあ、どうやったら子どもたちに伝わるか？子どもを並べて授業するの？いやいや、そんなことは自然のすべては伝えられないだろう。そう考えた時に、「自然体験」や「環境教育」というキーワードに巡り会っていきます。

それまでも環境教育が大事だという認識はあって、10年以上前から森や山や自然などの体験活動に携わってはいたんです。ただ、そのころはまだ川の体験活動が少なかった。そこで「NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会」（以下R A C）に出会いました。川をフィールドにして活動している各地のNPO法人・市民団体が参加して2000年に設立された、日本で唯一の、川



明治30年代に築造されたアカタン砂防堰堤群は、100年以上を経た今も周囲の自然景観と調和しながら砂防堰堤として機能しています。

の専門家の集まりです。R A Cでは子どもたちに川のことを教える指導者を育成しているのですが、その中でも最高位であるトレーナーの資格を取得しました。

さらに、地域をミズベに巻き込む活動へシフトしていったわけですね。

2009年に「日野川に砂礫河原をとりもどす会」というプロジェクトを立ち上げました。砂礫（されき）河原というのは、小石から比較的大きい石までさまざまなタイプの石がある河原のことです。川魚の住みやすい環境です。今でこそ日野川は整備されてロケーションもよくなりましたが、このプロジェクトを立ち上げる前までは草や木が無尽蔵に生えていました。ジャングル化したミズベはとても危険です。洪水の阻害にもなるし、人がなかなか近づけなくなり犯罪の温床にもなる。砂礫河原が復活すれば、川に棲む生きもののだけでなく、地域住民にとっての環境改善にもなる。

日野川流域の市民団体はもちろん、漁協や行政、研究者の方々と協力して活動を開始。砂礫の上の土砂を重機で取り除いたり草木を刈り取ったりして、河原の姿を甦らせました。

しかし、水の量や流れ方などが変われば再び土砂で埋まる場所もありますし、定期的にメンテナンスしていかなければ木や草が生える。そのためにも、もっと多くの流域市民の人々活動を知つてもらい、参加してもらいたい。そこで、まずはせっかく復活したこの砂礫河原に来てもらう取り組みを始めました。

整備されたすばらしい河原でも興味がないと誰も来ない。

そこに興味のひと零を落としたんですね。

2009年、「そうだ！川に行こう！」をスタートしました。8,000匹ほど放流したアユを手で摑まえる手づかみ漁や、ラフティングやEボートでの川流れ、砂礫河原の生きもの観察など、川遊びを通して日野川の魅力を発見し、砂礫河原への関心を高めるイベントです。同時に、子どもたちにはライフジャケットを貸し出し、川のリスクもきちんと伝える。環境教育の場でもあります。

そして回を重ね調査したところ、25～35歳の若い世代（独身者）があまりお見えでないことに気づきました。「そうだ！川に行こう！」に来るのは、親子連れやお孫さんと一緒に、家族連れが多いんです。このイベントに来ていない世代にも合うミズベが必ずあるはずだから、ぜひそういう企画をしたいと思ったんです。長くなりましたが（笑）、それが「おしゃれなり・BAR」着想のきっかけです。

日本のミズベ、といったらFUKUI。 FUKUIを、世界に名が轟く リバービジネスの故郷にする！



「おしゃれなり・BAR」におけるリバービジネス創出の構想をお聞かせください。

「川」だと書いた「かわど」読みます。この地域には川をなりわいにしている川人が昔はたくさんいました。それで、若い人をターゲットになにかやるんだとしたら、新しいリバービジネスというのもあるんじゃないかな、と思ったんですよ。

というのも実は、「おしゃれなり・BAR」の根柢にあるのは「少子化&定住化対策」という大きな目標なんです。リバービジネスはその大きなフレームの中の一部です。私のひとつのゴールは、「このミズベでカフェを開く。それならここに棲んでみよう。ここで結婚して子どもも育てたいな。よし、やってみる！」そんな人が1人でも現れたとき。大自然の川の中で、子どもたちがなにも考えずに遊ぶ。そんな景観を創出していきたいんです。

運営のポイントを教えてください。

お店には、ただ営業で利益を上げたいというわけではなく、川に着眼点を置く方に限っています。経営者の方々には実店舗とは少し目線を変えながら経営していただいて、普段は来ない顧客層を獲得してもらいたい。基本的にビジネスなのでプロのおもてなしをご提供していますし、入場料を設定することで来る方のボテンシャルも上げています。重要なのは、補助金・助成金を投じないこと。そうすることでお店側も営業努力をしますし、プロの提供するサービスに舌鼓を打つてもらうことで、この空間自体のクオリティも上げています。

だからといって、行政が関係していないかと言えばそうではなくて。このイベントに必要な巨大テントを留めるためには、大きなアンカー（杭）がいります。それをイベントの開催用だけでなく地域の防災対策として、有事の際の拠点となる防災基地にも役立てられるような常設のものにしてはどうかと提案したところ、市役所発注の工事として完成することができました。こういった、行政だけにしかできない支援もあります。民間と行政、お互いができるベストを尽くすことで、地域をよりよくしていく。それが大事なのだと実感しています。



3日間に渡って開催された昼・夜のイベント。

2015年は外国人のお客様も多く参加いただきました。



日野川流域の未来を、どう描いていますか？

日野川の一連の取り組みを国交省、県、市役所が応援してくれていることで、流域市民の意識も上がってきています。こんなにボテンシャルが高い地区は、なかなかないんじゃないかな。私は新しいリバービジネスを、ここ福井県日野川を発祥として広めたい。と大きいことを言っているんですけど（笑）外国人に「Do you know Japan?」と質問したとき、「Yes! KYOTO, TOKYO, FUKUI!」って言わせたいんですよ。たとえばスキーダララNISEKOが出てくるように「日本のミズベといったらFUKUI！」だと返ってくる。そんな野望を抱きながら、これまでにない新しいリバービジネスの創出を手掛けていきたいですね。





雲南市産業振興部商工観光課副主幹の肩書きを持ち、観光P.Rに従事。雲南市・奥出雲町・飯南町と3市町合同の観光誘致プロジェクト「おくいずも女子旅つくる!委員会」の運営にも携わる。

おくいずも女子旅つくる!委員会が発行する「女子目線」たからこそ発見できる、「おくいずも地方」の新たな魅力を発信するフリーペーパー「Okutabi」は3万部を超える。



鈴木佑里子 女子パワー発信者

■「おくいずも女子旅つくる!委員会」とは どのような団体なのでしょうか?

雲南市と奥出雲町、飯南町の3市町がまたがる「おくいずも地方」をPRするための団体です。委員会のメンバーは3市町の商工会やJA、行政の女性職員10名です。「女子目線」という今までになかった角度からおくいずも地方の魅力を掘り下げ、旅の楽しみ方を提案する情報誌「Okutabi(オクタビ)」を発行しています。また、おくいずも地方を堪能するさまざまなワークショップやイベントなどの体験プログラムを1か月間かけて開催した「Okutabi むふふサマー」や、おくいずも地方を旅する女性28人に焦点をあてて制作したインタビュー・ビーコンコンテンツ「彼女たちが旅に出る理由」の発信など、「Okutabi」と連動した多岐に渡る企画も運営しています。

■「おくいずも女子旅つくる!委員会」が 発足した経緯をお聞かせください。

2013年3月に山陰と山陽を結ぶ「中国横断自動車道尾道松江線」が開通しました。広島県の尾道から島根県の松江をつなぐ経路で、今までにくつかった山陽方面の人が流入してくると見込まれました。この道路の中の無料区間終着点というのが、雲南市の中心部にあるインターチェンジなんですね。出雲大社や松江城がある出雲市や松江市は観光地としてぎわっていますが、おくいずも地方は素通りされる不安がありました。しかし開通をチャンスに、無料区間を降りてこのおくいずもエリアで遊んで行ってもらおうと。

それで、もともとこのエリアは消防や介護保険など、ひとつの市町だと採算がとれない行政事務を3市町で連携して行う「雲南広域連合」

という組織がありました。開通を契機に3市町広域での観光を売り込んでいくという話を持ち上がり、立ち上がったのが「おくいずも女子旅つくる!委員会」です。

■ダム見学を組み込んだツアーや 川辺で踊った「100人 de ヒゲダンス」など、 ミズベ資源をユニークに使っていますね。

ダム見学は20~30代の女性モニターが参加するツアーや組み込んでみたんですね、最初は不安が生まれました。そこだけ異色だ、おもしろいのか、つ(笑)。このエリアには尾原ダムと志津見ダムという2つのダムがあるんですが、貴重な観光資源にもなるんですよね。近くにあったはずなのに、気づきませんでした。尾原ダム管理支所から女性がダムに来るようPRしてほしいとのお話をあったのが縁で。私た

ちもダムに行ったことがなかったので、まず見学しに行ってみました。これがおもしろい!長いエレベーターを下ってダムの内部に入るとどこかの基地のような雰囲気。川の生態系を崩さないためにダム湖内で異なる温度の水をミックスして放出している話やその装置など、メンバー一同「すごい!!」と感嘆の声があがりっぱなしでした。私たちがおもしろいと思うんだから、きっとお客さんもおもしろいんだろう(笑)。するとやはり大好評で、毎回ツアーにはダム見学を組み込むようになりました。

「100人 de ヒゲダンス」はその時企画中だったイベントのモチーフがヒゲだったので、ヒゲと言ったらヒゲダンスだろうと思いつきました(笑)。場所に関してはおくいずもらしい場所は「願い橋」かな、ってみんなの意見が一致して。このエリアの象徴的なところなんですね。屋台もなにもない川辺の広場でしたが、子どもから大人まで多くの方にお集まりいただきました。おくいずもエリアで何かしようとすると、気づくとミズベにいる。思いつく企画の真ん中には川がある。



■ミズベは貴重な資源であると同時に、 切っても切り離せない存在なんですね。

おくいずもエリアはヤマタノオロチ伝説のモデルとされる「斐伊川」という大きな川でつながっています。斐伊川はただの川じゃない、この地域みんなの心象風景として広がっている。流れが異なるほかの川の地域の方と話すと、特に感じますね。川の流れが一緒だからこそ昔から運ばれてくるものが一緒だったり、採れる農作物の品種が同じだったり。祭りや文化、言葉、経済圏や生活圏など、共有している感覚が近いんです。人格の形成に川が影響している(笑)。そんなエリアにいる私たちだからこそわかる地域の魅力を掘り起こして、もっとたくさんの人々にここを訪れてもらえるような情報発信をしていきたいです。



おくいずも女子旅つくる!委員会

おくいずもに、華やかパワー炸裂! “女子目線”が、ミズベをおもしろくする。

飛騨高山のミズベに、 川床ブームを巻き起こせ!

■高山の川に川床をつくろうと思った 経緯を教えてください。

まず、ぼくは東京にてサラリーマンをしながらターンでこちらに戻ってきた人間なんですね。生まれ育ちはここ高山。ずっとこのミズベで暮らしてきましたが、東京に行くまでは別に普通の川やな、と思っていました。

社会人になって東京で、訪れる機会が時々あって、そのとき「川床」というものを知って、いつか飛騨でも川床ができるといなあ、という気持ちが芽生えました。この地域のミズベへの魅力を伝える手法として、川床という選択肢が「アリ」なのではないかと思いました。

東京で働いていたときの会社の本社が京都で、訪れる機会が時々あって、そのとき「川床」というものを知って、いつか飛騨でも川床ができるといなあ、という気持ちが芽生えました。この地域のミズベへの魅力を伝える手法として、川床という選択肢が「アリ」なのではないかと思いました。

■実際に川床が実現するに至った いきさつを教えてください。

高山市青年会議所に所属しているんですが、今年ぼくがイベントの企画を考える委員長をやらせていただくことになりました。青年会議所は、ここ高山の「明るい豊かなまちづくり」をめざして日々活動をしている組織。高山青年会議所の役職は半年度制で、毎年役が変わっていきます。それで今年その委員長をぼくが引き受けさせていただくことになって。みんなで出資したお金で事業をしていいよ、という話にならったので「今までやりたかったことをやってみよう!」ということで、ここ高山市に初めて川床を出現させる『川床を楽しめナイト』を提案しました。

■提案に対して、周囲の反応はどうでしたか?

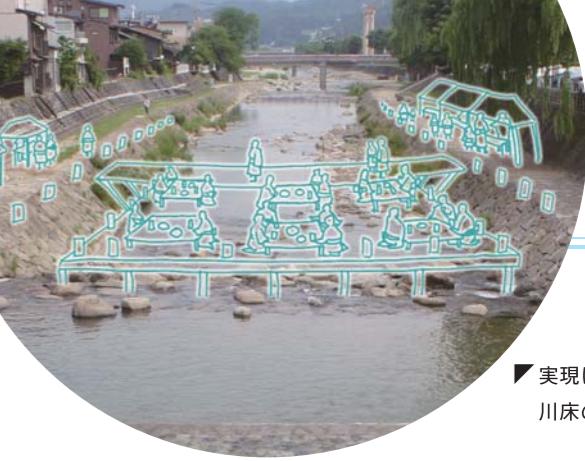
おもしろい、やってみよう、というよりは「ほんとにできるんか? 許可が下りるんか? !?」というが正直なリアクションでしたね。青年会議所のメンバーには、建築関係に従事している方もみえ、今までの経験から、川でなにかをやることに対して許可が下りにくい、というイメージがあったようです。でもぼくは大概のことはなんとかなると思って生きている人間なので(笑)、やりたいと思ったらやればいいじゃないかと思い、行動に出ました。

■高山での川床実現に向かい、 具体的にはどのように動いたのでしょうか?

ぼくが運営しているコワーキングスペースがちょうど今回の「川床を楽しめナイト」の会場となった宮川沿いのあるんですけど、たまたま仕事の関係で知り合った方にその話をしたら「最近ミズベがアツいよね」っていう話になってしまった。それでミズベリング・プロジェクトのことを知りました。すぐにミズベリング・プロジェクトのホームページの問合せフォームから、「ミ



青年会議所のメンバーと一緒に。



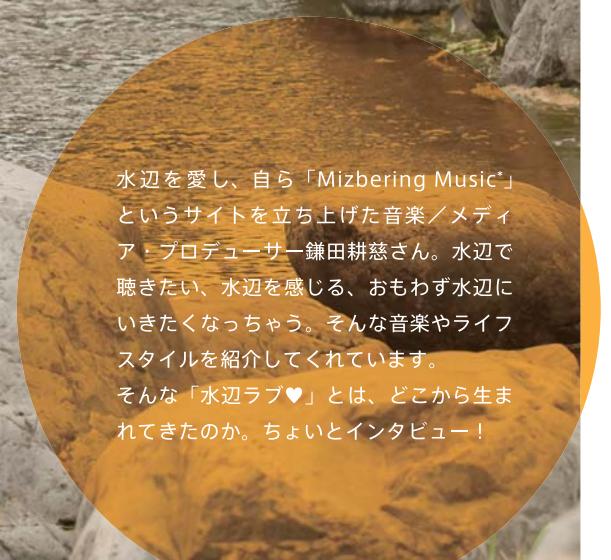
■実現は難しいでは?と言われた
川床のアイデアスケッチ



地域構想パッショニスト 住尚

公益社団法人高山青年会議所の2015年地域環境委員長。一度は地域を離れ東京で働いたが、世界を巡る旅を経て、飛騨高山にUターンした。自らが生まれ育ったミズベの魅力に気づき、元気をもつとおもしろく、より素敵な場所にしたいという想いを抱くようになる。家業である高山印刷株式会社の経営とともに、飛騨高山から新しいムーブメントを創造・発信する拠点として、コワーキングスペース「Co-ba hida takayama」を開設。地域のコミュニティをつなげる活動を日々行っている。

鎌田耕慈 ミズベ音楽セラピスト



■ 音楽との出会いをお聞かせください。

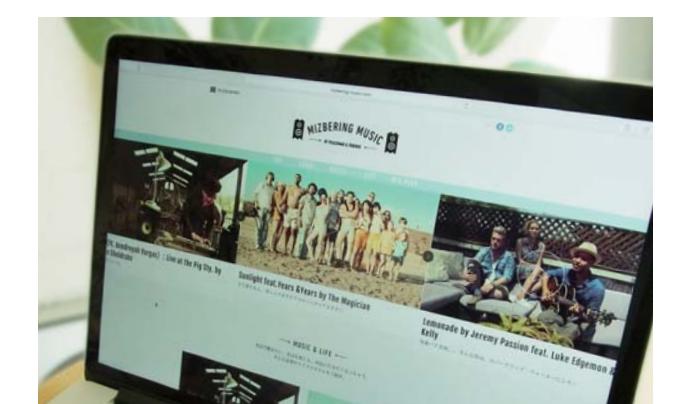
大学の在学中からラジオ番組制作を手伝いだしました。兄の影響で、黒人音楽、つまりソウルミュージックから入りました。ソウルミュージックから初期のヒップホップ、RUN DMCとかに興味が移行していくました。ここまで熱狂しているなら日本初のヒップホップ番組を作りたいことになってNACK 5(埼玉県79.5FM)で「Street Flava」という番組をつくりましたのが最初です。

ラジオ番組が好きなのは大学を休学してアメリカに住んでいた時、カーラジオばかり聞いていた影響が大きいですね。音楽のことだけを四六時中話している。あーいうスタイルの番組が好きですね。日本では小林克也さんが「ベストヒットUSA」とか、音楽だけの専門番組をやっていましたね。

アメリカから帰ってきてから「音楽やりてーな」って訳で、制作事務所で3年働いて、クラブ音楽にはまって。いまでいうフェスのようなことをばかりしていました。それでDJカルチャーやクラブカルチャーに特化した番組をつくろうと思ったんですね。当時、日本には無かったから。それで「Peace」という会社を立ち上げたんです。DJカルチャーやクラブカルチャーを追求する制作会社。でも会社をつくったからは、なんでもないと食ていけない。音楽づくり、CM、サウンドロゴなど、音に関する全てをつくる会社になった。イギリス国営放送でトップDJが毎週やっていた番組BBC Radio 1「Essential Mix」なんかいち早く輸入してましたね。外国語専門放送としてスタートしたInterFMの立ち上げに参加もしました。

■ 仕事のし過ぎで「水辺」と出会う?

そんなこんなで仕事漬けの毎日、週10本くらいリミージックから入りました。ソウルミュージックから初期のヒップホップ、RUN DMCとかに興味が移行していくました。ここまで熱狂しているなら日本初のヒップホップ番組を作りたいことになってNACK 5(埼玉県79.5FM)で「Street Flava」という番組をつくりましたのが最初です。



<http://mizbering-music.com/>

風や水の音、夕陽…。 僕は、水辺に助けられた男なんです。

■ リバーサイドにカフェをつくることになった!?

川沿いに引っ越してきた家の前に、「川の家」というかおんボロの店があって、そこでおばちゃんがラーメンや焼きそばをつくってくれていた。河川法がない時代からあった店で、昔はそこで夕涼みしたり、魚釣りしたり、食事やお酒を楽しんでいた。昔の二子玉川エリアは、中央の偉いサンたちが黒塗りハイヤーでやってきて、川遊びを楽しむリゾートだったんですよ。

で、ここからが僕が川と向き合うきっかけにならった。2002年頃、その店を経営しているおばちゃんに「お店をやらないか」と持ちかけられた。30歳のとき。で、その掘建小屋を仲間と改造して、ベンキを塗って、「カフエ Peace」をオープンさせた。オープンスペースが売りだったので、片手で食べられるピザとビールのお店で、いきなり人気が出ちゃって、近隣の住宅とも近いこともあって「移動しろ」と勧告されて、兵庫島の向こうに引っ越し。そこで出来たのが、いまじゃ伝説のカフエになった「Peace Tokyo」なんです。僕が水や風に助けられたから、同じようにオープンでリゾートなイメージにしたかった。ここもビールやワインと軽食といい感じの音楽!をモットーにして、2010年の年末まで、夜な夜なDJをやっていました。



伝説のカフエ「Peace Tokyo」

■ お好きな水辺はどこですか?

なんといっても多摩川。サンセット時間で富士山が見えるのは最高です。海外でいえば、ギリシャのサントリニ島。サンセットと海辺。タイのブケットから1時間ほど上にあがったカオラックのサンセット。あ、海外は海辺が多いなあ。

■ 水辺の大切さとは?

ミズベの大切さをもっと知ってほしいですね。自然を感じること、目に見えない波動を共有するミズベの美しさ、波の美しさ…。結果、それは「ありがとう」とか、「たのしい」とか、「うれしい」とか、人間のプリミティブな感情を感じやすくなるものだと思うんです。

ミズベや音楽を通してモノやお金以外の目に見えない感動を届けていきたいですね。みんな、ミズベリング・ミュージックをチェックしてくださいね。Here We Go!

“知る機会”をつくると、 ミズベはスムーズに 動き出す。



笛吹市の「かわまちづくり計画」

■ 山梨県では市や地域をあげての 大規模なミズベリング・プロジェクトが いくつか動いていると聞いています。

富士川水系が流れる山梨県では現在、さまざまなミズベリング・プロジェクトの取り組みが始まっています。きっかけは、2014年の6月。市名の由来となっている「笛吹川」を利用しで地域活性化への取り組みをしたい、という話が笛吹市の市長さんから持ち上がりいました。国土交通省でミズベリング・プロジェクトが立ち上がったのが、ちょうどその半年ほど前。笛吹市の話は、まさにミズベリング・プロジェクトぴったりなんじゃないかと思いました。それで、市長さんに「ミズベリング・プロジェクトという動きがありまして」ということを説明しに行つたんですね。そうしたら「よし、やろう!」という話になってしまって、翌月7月には笛吹市のミズベリング・プロジェクトチームが立ち上がりました。「○○ができたらしいなあ」と話し合ったアイデアを2枚の平面図に盛り込んで、2015年の1月に「笛吹市ミズベリング構想」として公表されました。笛吹川の護岸整備やカフェなど商業施設の誘致、川床の整備などさまざまな構想を具現化するべく、現在メニューごとに立ち上げた10チームが動いています。



構想のひとつ、「川床」イメージ

一方、笛吹市がこうした新たなミズベリングの取組を始める以前にも、県内ではミズベを活用した地域の整備事業が動いていました。富士川町の「かわまちづくり計画」です。これは、川辺に建つ富士川病院を中心とした近隣の河川敷を整備し、病院と連携したミズベの利用や陸上競技場の建設を計画している、いわば河川環境整備事業。そこで笛吹市の現状などを伝え、事業としてはカバーしきれない水辺に関するPR広報の側面のあるミズベリング・プロジェクトと一緒にやりませんか?と提案したんです。

現在では、笛吹市や富士川町のほかに、甲府市や南アルプス市、山梨市など、さまざまな市町が「ミズベで何ができるのか?」と、富士川水系ミズベリング・プロジェクトとのコラボレーションに関心を持ってもらえるようになりました。

■ 富士川水系のミズベリング全体を 見渡しているのでしょうか?

「ミズベリングとコラボしませんか?」と、いろんなところへ飛び込んで声をかける言い出しへというところですね(笑)。共通のニーズを抱えていそうな異業種間をちょっとつなげて、コラボレーション話を持ち込んでいく。

たとえば富士川町の例では「ミズベリングメ

けれどできなかった。この研究会に入って異業種とコラボする方法や知識を知ることができたことで新たな事業が生まれることになった。そんな新事業創造が、遠くない未来にここ富士川水系で実現しそうな気がしています。

国土交通省関東地方整備局の甲府河川国道事務所調査第一課にて課長を務める。山梨県に流れ富士川水系全体を見通し、各地域のミズベリング・コミュニティをサポート。地域を活性化させる人育成を目的に富士川水系ミズベリング研究会を立ち上げました。今まで水辺に関する構想があった

共通ニーズを持つ異業種間のネットワークをつなげ、異業種間ならではの相互連携による新たなミズベ事業の可能性を追究している。

異業種マッチングプランナー 黒沼尚史





妄想リスト 東浦亮典

ミズベリング・プロジェクトとの出会いを教えてください。

2014年春の東京会議がきっかけです。すぐ2回目の会議を、発起人の坪田さんが中心になって「ニコタマ会議」立ち上げられました。私は、オープンイノベーション・スペース「タリリスト BA」の運営責任者をしていたので場の提供者という立場で「ミズベリング・プロジェクト」のことを聞き、「面白いんじゃないか」と。で、ついでに二子玉川の仕事をしているので、

入り込みました。東急田園都市線と東急大井町線が交差する「二子玉川駅エリア」は、まさしく多摩川に隣接する世田谷区のまちで、水辺が真横にあって自然環境が豊かな側面と、渋谷からも10分ちょいといふ都市的な要素とのバランスがとれているまちなんです。そういうハイブリッドなまちだからこそ、ここでこそ働きたい、クリエイティブに働きたい、なんとかそんなイメージを世の中に広げていきたいと思いました。

会議の登壇者にも担ぎ出されたのがご縁のはじまりですね。

2015年、ようやく「二子玉川ライズ」がグランドオープンしましたけれど、このまちのブランディング担当になったのは2009年。再開発計画というのは手続きも含めて時間がかかるものなんです。都市計画的には20世紀の段階で、すでにこのエリアの骨格が決まっていたのですが、いまの社長が、「クリエイティブなまちにしよう!」と突然いうものですから、まちにしよう!

**内緒ですよ!
「人と自転車専用の橋」を
多摩川に架けようと妄想しています。**

東急電鉄株式会社の電鉄マンにして、まちづくり開発の総合プロデューサー。沿線全体のマーケティングやプランニング、プロモーション、エリアマネジメントを担当されている。多摩川を知るには上流から下流まで知らないといけないと、多摩川の上流(羽村)~下流の羽田(天空橋)までの50kmを得意のランニングで走ったりするバイタリティミドル!

地域の人との関係づくりは、どうですか?

再開発をやっている部隊は動けないので、私たち別働隊がクリエイティッシュティコンソーシアムという団体をつくって、二子玉川ライズに限らず、二子玉川の周辺を、クリエイティブなまちにしていくFACTづくりをしていこうとしたのです。2009~10年から、この地元に入り始めて、「ライズとは別にこのまち全体を盛り上げていきたいんだ」ということを地元の町会長さんとか商店街の人といろいろお話しをしてきました。

その中で「二子玉川の地域資源ってなんですか?」と地元のの方に聞いても「多摩川だよ!」と10人が10人仰ぐ。でも「多摩川を活かしたまちづくりできていますか?」と聞くと、「それができていないんだよね」と返ってくるわけです。大きな催事としては年一回の多摩川の花火大会と春に兵庫島公園でやる「花みず木フェスティバル」が公式の行事ぐらいで、他には川を中心とした街づくりはできていない。それに、「まちと川には間があって(二重堤防)、簡単にアクセスできないし、地元の小学生は「一人で川にいっちゃいけません」という教育もされているようで...。川が地域資源の宝といいながら実際の川とのコミュニケーション距離があることがわかったんですね。だけど、なにしろ多摩川の魅力って、一級河川でありながら、これだけの自然の河川敷が残っている。また川の反対側には国分崖線という縁の崖線があつて、都市的な環境なのに水と緑が近いところなんですね。

去年、ポートランドに行ってきましたが、ウイラメット川の脇でコンパクトでミックスドユース(複合利用)なまちづくりが出来ていて、「働く×遊び×くらし」が同時に実現できることが、ほんと二子玉川に近いな、と思いましたね。真似するつもりはありませんが、ああいうまちの要素=クリエイティブマインドを掲げ立てるまちができそうな予感を企業人としても個人としても活かしていきたいと思った時、「ミズベリング」という言葉がポンときて、あ、これだな!直感的に思いました。

地域の人の活動をリスペクトしながら?

いま「ニコタマ会議」は改称して「二子玉川未来会議」という名前になりましたけど、この会議に参加して何が良かったのかというと地元住民だけでなく、NPOとか市民団体とか、実際にこの多摩川流域でいろんな想いで活動している人が、たくさんいることがわかったことです。その皆さん一人ひとりが可視化されて、今までどんな活動をしているのかマイチわからなかった間柄が会議で一同に介したことでお互いを知るきっかけになり、繩張り争いでなく、逆にオープンになって、一緒にリスペクトしながらやっている!と気持ちがひとつになったわけです。



東浦さんが思い描く未来予想図はどんな感じですか?

ライズ自体の開発は終りましたが、このまちがもっとクリエイティブで水辺を活かしたまちになるには、まだまだやらないといけないことはあるので、その仕込みをいまやっているところです。それが全部ができるかは別として、私の妄想としては、もうちょっと都市部と河川が、安全に快適にスマーズにアクセスでき、ワクワクするような動線で川辺にアプローチをうまくつくりたい、と思っています。

で、ほんと妄想ですが、僕はそこから舟運をやりたい。事実、多摩川は水深が浅いし、下流に堰があるので、船を浮かべるのは難しいのですが、ここには昔、川を渡る「二子の渡し」もあったところなので、ゆるい交通体系として舟運のようなもの復活したいな、なんて思っています。

場合によっては陸路専用車かもしれないし...。二子玉川発→武蔵小杉経由→羽田空港行きをつくりたい!なんてニヤニヤしています。

羽田へのアクセスも舟運で一気に近くなる!

あともう一つ。まちがこれだけ利用者数が多くなってアクセスも頻繁になってくると、人専用の橋が必要になってくる。いまは二子橋しか

なく、あれは車の橋でシャビイな歩道はあるけれど。快適に渡れるものではない。

こんど楽天さんが本社を移転してきて1万人の社員さんが日々通うとなると、ラッシュが大変なので自転車通勤を推奨されているんですね。その時に、このままだと危なっかしきすぎで渡れない、と言われていて、人と自転車のためだけの、とてもデザイン化された専用橋を渡したいな、と思っているんですね。これ妄想2!ですね。

以前、ニコタマ会議で世界的な橋梁デザイナー「ローラン・ネイ氏」を呼んで「ニコタマ・ブリッジ会議^{※2}」をしましたが、実はちょいと描いてもらったんです。

え、ほんとに描いてもらったんですか!?

もちろん橋をかけるのは公共工事なので、簡単ではないと思っていますが、防災上の見地からすると(3.11の時に多摩川を渡れなくて帰宅困難者が溜まったエリアでもある苦い経験があるので)人を安全に渡す意味で、もう一本、橋は必要だと思っていますし、これから車社会ではなく、人間中心のまちづくりになっていくなかで、車のための橋より、人や自転車が楽しく渡れて、コミュニティが醸成されるようなデザイン化された橋が欲しいなと思っています。妄想

で

でも誰かが言わないとできないし、隅田川でも「桜橋」というX字のデザイン化された橋がありますけど、あれって台東区と墨田区の友好の架け橋なんですね。デザイン性もいいし、市民の憩いの場になっている。その手本をこちらでも実現したい。

そういうのは妄想何年?

構想何年でできることですか?

いや、すべては財政と地域住民の合意形成だと思いますけど、車がパンパン走るものではなく、人のための橋なら、そんな反対する人はいないんじゃないかなと思うんですね。そうすると対岸の住民同士が行き来できるわけですね。

いま地域の人や行政の人と「二子玉川エリアマネジメント」というエリアマネジメント団体の幹事もやっています。地元で公共空間を使って、どういうことで盛り上げていけるか、賑わいをつくるのかを議論している最中ですが、そういうアイデアの中でもランニングステーションとかオープンカフェとかは川辺につくりたいね、とよく議題に挙がっています。僕もよく川べりを走りますので。

お手本にされている水辺はありますか?

先ほどのポートランドも1つですが、いちばん頑張っている「水都大阪」は水辺空間をうまく利用されているなと思いますね。行政も市民も、みんなでやっている関係づくりは素晴らしいと思います。

私たちの場合、京浜河川事務所さんとの関係も、お互い知り合う前は、僕らがハードルの高い話をしているのかなと思っていたのですが、ミズベリング勉強会で二度ほどレクチャーしてもらったら、意外と水辺を市民発想で盛り上げているし、手順さえ踏めば、もっとできることはあるんだな、と意識が変わってきた。

ここは高島屋さんと東急、それに楽天さんという大きな企業もあるので、市民と行政と企業が連携したら、なんか面白いコトを起こせるんじゃないかなと期待しています。

お仕事柄、未来を見るのが仕事な訳じゃないですか?それって妄想ですか?

そうですね(笑)。それに強く想いづけると、いつの間にかに、そうなっちゃうんですよ(笑)。クリエイティブなまち? 働くまち?...。何いっちゃってるの?と最初は失笑されますけど、信じてけば、そななるんですよ。人の流れや意識を変えるのが、開発の醍醐味なので。トライ&エラーをしながら、これからもやっていきたいですね。



※1 二子玉川ライズ
<http://www.rise.sc/whatsrise/>

※2 ブリッジ・デザイン会議 ローラン・ネイ氏
<http://mizberist.jp/archives/11374>



人と自転車専用の橋。
新しいコミュニティが生まれる橋を妄想中。



「ここに橋を作りたい!」



©NEY&PARTNERS